



GREEN COMMUNITY COLLEGE

NEWS

きのくに

2014〈春夏号〉
Vol.19 [1]

きのくに活性化センター 発行責任者／中田肇 発行日／2014年8月 〒646-0011和歌山県田辺市新庄町3353-9 BIG・U内 TEL&FAX0739-26-9670 <http://www.aikis.or.jp/~aoi-kii/>

熊野の盆と扇踊り

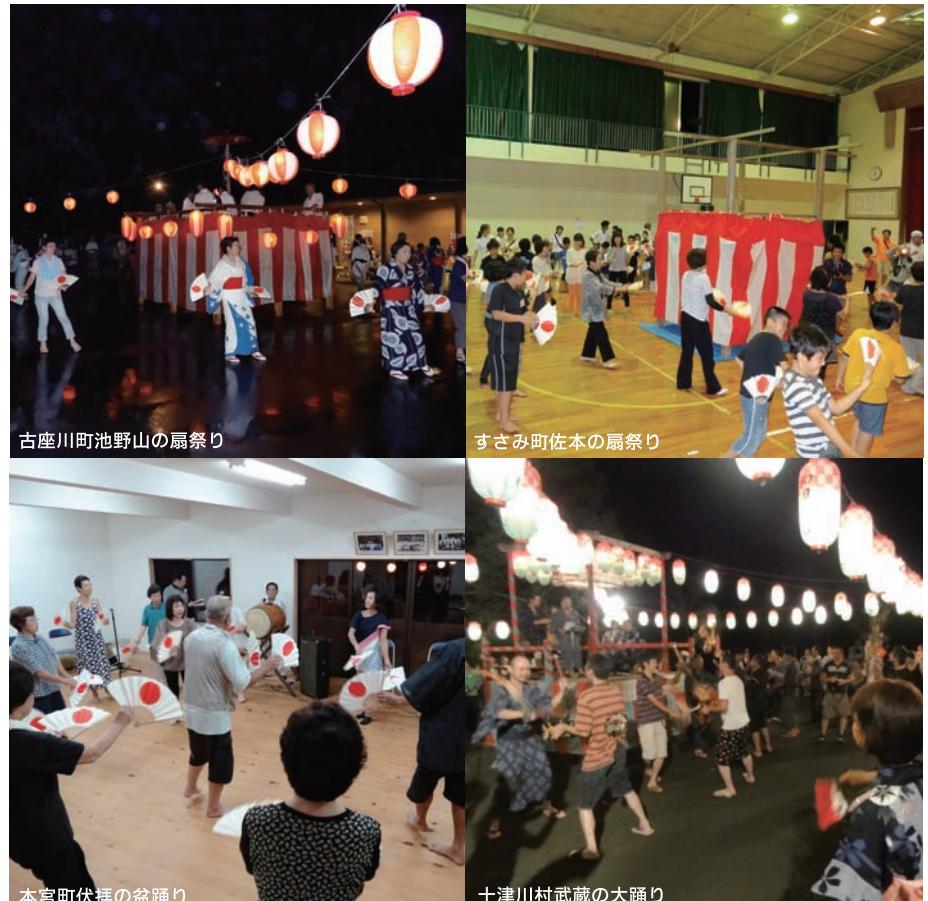
和歌山大学紀州経済史文化史研究所 特任准教授
吉村旭輝



熊野地方の盆行事は、集落における柱松や盆踊り、また各家における精霊船や盆棚を設けるなど、大切な祖靈を迎え、また送る行事として盛んに行なわれている。そのなかでも盆踊りは熊野ではおもに新仏や無縁仏の供養踊りとして踊られるほか、地域住民を結ぶ紐帶として欠かすことができない行事となっている。この盆踊りのなかには熊野各地に「地踊り」と呼ばれる踊りが点在している。そのなかでも有名なのが本宮町の伏拝、土河屋、大瀬、萩などで行なわれている地踊りである。さらに熊野川上流の十津川村でも盛大に行なわれている。これらの地踊りは締太鼓による風流囃子物の要素に扇踊りがつき、小歌形式の歌もある。

かつて熊野地方では熊野川流域だけでなく、扇踊りが伝承されていた。上富田町生馬の鳥渕から芦山・篠原地区では音頭や口説きを扇で踊る扇踊りが伝承されていた。しかし現在は踊られていない。このように扇を使った盆踊りが近年次々と断絶の危機にさらされている。その要因として考えられることは、過疎化や高齢化はもちろん、なによりも盆踊りが時流の影響を受けやすいため、これまで価値づけがされてこなかった地踊りは地域の宝と認識されることもなく次々とその形を変えていくのである。

しかし、扇踊りが地踊りとして今なお伝承されている地域もある。それが古座川流域の池野山、月野瀬、中湊、古田、岩淵などと佐本川上流で古座川町に隣接するすさみ町佐本である。古座川下流域の池野山や中湊などでは、伊勢音頭の扇踊りのみが伝承されている。伊勢音頭は伊勢遷宮の木曳木遣り唄が発達したもので近世後期から近代にかけて全国に広まり、全国各地で盆踊りや祝儀唄



として歌われている。

また佐本の扇踊りは、5年前に途絶えていた。しかし、2014年(平成26)に復活している。佐本の扇踊りでは、数え歌形式の歌(「傾城阿波鳴門」が元)を締太鼓で囃した扇踊りが行なわれる。そのため、古座川下流の伊勢音頭を主体とした扇踊りとは歌が違う。しかし踊りの振りはよく似ており、その関係を一概に否定できない。

これら歌の違う盆踊りを結ぶ鍵となる盆踊り歌が、古座川最上流部の古座川町平井に伝承されている。現在平井の盆踊りは団扇をもって踊っている。しかし、もとは扇踊りであった。その歌は小歌、順礼歌、口説きで、歌詞が残されている。この平井盆踊り歌のなかの「小歌」には、古座川下流の地域と同様の伊勢音頭も含まれている。また順礼歌の歌詞は、佐本の数え歌の歌詞と一致している。

- p1 熊野の盆と扇踊り 吉村旭輝
- p2 体験交流型観光で地域を変える 奥山沢美
- p3 熊野の香りをブランドに 竹原真由美
- p4 女性だからできるおもてなしを 森昌子
- p5 紀南地域と経済学部との懇親橋へ 上野美咲
- p6 きのくに活性化センター定期総会、編集後記

のことから平井の歌詞をとおして古座川流域と佐本の扇踊りに歌の共通性を見出すことができる。さらに古座川流域の伊勢音頭は、本宮町伏拝や十津川村でも踊られるほか、伏拝とは扇を左右に振る所作、また扇の要を打ち合わせる所作などが共通している。このように歌は違えども小歌、順礼歌、口説きが混在し、また佐本では締太鼓による囃子であることから、かつて古座川流域や佐本川流域でも本宮町や十津川村と同様の形式の盆踊りが行なわれていたことが考えられる。

ここに挙げた扇踊りは、熊野各地で行なってきた盆踊りの一端に過ぎない。しかし、かつて多くの地域で踊られ、夏の風物詩であった扇踊りも、その多くが消滅や形を変え、現在本宮町と古座川周辺部にその痕跡をみることができる。

体験交流型観光で地域を変える

～心熱き仲間たちと歩んで10年目～

一般社団法人南紀州交流公社
理事長 奥山沢美



古くから木材の町として栄えた日置川町は、農林水産業の衰退とともに過疎高齢化がすすみ町から活気が失われつつありました。そんな中、行政と住民が一緒になって地域の活性化をはかりようと 平成16年10月5日、賛同してくれる町内の各種団体と企業、個人が会員となり町づくり協議会として「大好き日置川の会」が発足しました。

何をすればよいか、何を取り組めばよいかと会議を重ねる中で、地域のありのままの暮らしや営みの中でそこに生きる人々の生き様を伝える「ほんもの体験」の推進による交流人口の拡大を目指す事になりました。

今まで観光という言葉も聞かれず、まして町外からの観光バスも来なかつた地域にどういう人達がきてくれるのか想像もつかないまま、新しいマーケットを作り出し、人がかかわり高めあう旅、体験交流型観光で児童生徒の教育旅行の受入を柱にしま

した。平成18年から本格的にパンフレットの制作にとりかかり、翌19年修学旅行や宿泊体験活動などを取り扱う旅行会社へ営業活動を行うと同時に、教育旅行の目的地となるための受け入れ態勢の整備を始めました。もちろん学校からの要望が多い農山漁村生活体験(民泊)の受入は最重要課題です。

日置川上流の市鹿野地域から民泊のお願いに回りはじめたある時、民家の方から「町づくりは皆で楽しくやりましょうよ!」と思いまよらない応援の言葉を頂き、友達が友達を呼び小規模校なら受入ができるまでになりました。

平成20年からの受入予約に何とか間に合い、「泥棒つかまえてから縄ゆいやな」と皆から言われた言葉が昨日のように思い出されます。

和歌山県全域で「ほんまもん体験」が整備されていますが、日置川では更にプログラムの造成やインストラ

クターのレベルアップ研修など内容の充実に努めました。

受入に際して安心安全は勿論、民泊とほんまもん体験を通して教育効果の高い受入ができるかどうかにこの事業の成否がかかっています。ややもすると陥りがちな喜ばせる・楽しめるおもてなしの目的ではありません。民泊や体験を通して多くの人達と交流し、人と人、自然と人間のかかわりを大切にすることによる精神文化の向上が目的です。

平成23年には待望の法人化をし、一般社団法人南紀州交流公社と名前も新しくなり、コーディネート機能をもった事務局も設置しました。前身の大好き日置川の会から数えて今年は10年目を迎えることができ、地域にもたらした影響として、経済的効果と精神的効果が認められており、心熱き同志の仲間たちはじめ多くの関係者の皆様からのご支援ご協力の

おかげと深く感謝しております。

現在、40体験プログラムに厳選し民泊協力家庭100軒で大規模校の受入も経験し、同日に数校の受入も行い、外国人団体の受入も好評で自信を深めることができました。これからも教育旅行を始めとして社会教育、一般団体、CSR+組織教育、外国人との国際交流等多様な分野での受入を推進し、心豊かな日本をめざして地域一丸となり誠心誠意頑張ります。それが町の活性化であり、地域力の高まりにつながり、一次産業・地場産業の振興、私たちに出来る日置川を未来へ繋げる道だと思っています。



民宿 家族そろって夕食



対面式 よく来てくれました



日置駅ホーム待合壁画完成集合写真



握手でお別れ

熊野の香りをブランドに ～熊野の森と地域資源の活用～

m'affably(エムアファブリー)
代表 竹原真奈美



私が生まれ育った熊野地方は自然豊かな田舎町です。幼いころは山に入り草花を手に取り、夏は川や磯で日が暮れるまで遊びました。

そんな私がリラクゼーションのお店を始め、市販のアロマオイルを使用、販売するようになりました。アロマオイルは植物から抽出した天然の香りです。そこである想いがわいてきました。「自分が遊んだ山の香りは、どんな香りなんだろう?子供の頃に香ったあの香りは、何の植物だったんだろう?抽出してみたい!」

例えば、みかん。みかんといっても、今年のみかんの味は…とか、この地域のみかんは…など違いがあります。ということは、植物の香りにも、地域やその年の特徴が出るのではないかと考えたのです。

私のお店を利用してくださる方の中

に、Iターンで熊野に来て林業をされている女性がいました。彼女から林業が抱える現状の厳しさ、林業を続けていきたいという熱い想いを聞きました。間伐材として今まで商品にならなかつた部分でアロマオイルは抽出できるはず。そこが商品として価値を生めば、違った視点から林業と地域を活性できる!と思いました。

熊野地方は昔、林業で栄えた地域です。私は、もう

一度木の国(紀の国)として復活できないか、香りで故郷自慢ができるいいなと思いました。

さっそく彼女から熊野川町森林組合の組合長を紹介して頂き、取り組みへの協力をお願いしました。



「異業種と協力することは大切なこと。とにかく山には人が入らなければいけない」と快諾してくださいました。

山に入り間伐された木の枝葉や心材を運びだし、釜に入れて香りを抽出する。一滴一滴落ちてくる香りは、熊野で生きていた木々からのメッセージです。混じりっ気なしの有りのままの熊野の香り。

熊野は自然豊かな地域というだけでなく、世界文化遺産に登録された歴史と文化の町です。地元の人にとっては、当たり前で何も珍しくないかもしれませんのが、誇れる地域です。そこで生きてきた木や枝葉から抽出された香りは特別なものです。

今は、香りのお土産として販売を展開しています。香りは記憶とともに…。脳は香りと一緒に記憶していくというメカニズムをもっています。お土産として買ったアロマを香り、もう一度熊野へ行きたいと思ってもらう。一度も訪れたことのない人が、香りによって行ってみたいと思う。そんな役割を果たせたらと思っています。

私たちは、ただ香りを抽出して販売したいわけではありません。香りを通して地域とそこに関わる全ての人の想いを届けたいと思っています。

「熊野の香り」は、多くの人の協力でここまでできました。チーム熊野が想いを一つにして創りあげてきたものです。この香りに詰め込んだ想いに興味を持ってくださいり、TVや雑誌、新聞などで取り上げていただきました。それを見た方々から、是非熊野に行ってみたい!体験をしてみたい!など多くの反響をいただき、少しずつですが想いが届き始めていると感じています。

目指すは「香りの日本代表」です。国内だけではなく、海外にも香りを通して熊野を発信していきたいと思います。



堀由起さん(後列左)、羽田十実さん(前列右)

女性だからできるおもてなしを ～熊野古道沿いの年中無休の道の駅～

世界遺産10周年を迎えたここ中辺路で、道の駅「熊野古道中辺路」も19年目を迎えています。

私とこの店との関わりは事務の仕事のお手伝いからでした。当時は店の営業は午前8時30分から午後5時まで、冬は日没まで 定休日もあり、商品も陳列棚もあまりなく味気ないものでした。新国道もまだまだ途中までだったので気楽なものでした。

しかし、南紀熊野体験博が平成11年4月～同年9月に開かれた頃から店の様子は変わってきました。今迄見たことのないような他府県からのバスの数、観光客、何をどんなにっておもてなしの心もどこへやら一日一日をこなすだけが精一杯の144日間を過ごしました。今思えばあの時出会った人達には熊野古道はどんなに映ったのかな?今となっては反省しています。

この体験博が終わってから世界遺産に登録され、国道311号もより一層綺麗に整備され和歌山を横断する

近道として多くの方々が利用してくれる道の駅として和歌山県の顔「熊野古道の顔」となったような気持ちにさせなってしまいました。

じゃあ、この店に何が求められ何をしていかなければならないか? 多くの方々と向きあつたからこそ考え始めた自分たちへの問い合わせでした。

全く100%女性だけで運営して来た店です。この山の中に足を踏み入れてくれた一期一会のお客様にとってほんの少しの休息の場とは?まず考えたのは土地の農産品からの出発でした。大量生産ではない形や色にこだわらない、農薬や添加物に縁のない高齢者が生きがいに作っている野菜や梅や山菜を利用した加工品等いままで陽の目を見ることがなかった商品の販売。さんま寿し、草餅のように懐かしい田舎の味を店頭に毎日並ばせるようにするには? 古道を散策される人に地元ならではのお弁当はどうだろう。ここにしかないものは出来ないだろうか? たくさん

道の駅 熊野古道中辺路
店長 森 昌子

の? が多くの方々の協力により一つ一つ解決して店頭に並ぶようになりました。

次は旅行者の方にわかりやすい案内とは何か? 目的は、時間は、その日の天気は? どれも土地の者でないとわからないささいなことや質問に精一杯答えよう。手作りの地図を使い、車を走らせ、お客様との会話を大切にこんな当たり前のsuchな事がほんとうに難しくお客様の気持ちに何処まで近付くことができるかわかりやすく伝えられるか? お客様からの「和歌山の旅が楽しいものになりました」との温かいお手紙をいただいたとき、「あー良かった」と喜びの涙を流す日もあります。

営業時間も朝8時から午後6時30分に延長、道の駅としては珍しいなと思われる時間に変更しました。これは古道を歩かれる人がバスに乗れなかったり、疲れてお宿まで歩けなくなられた時、ドライバーのみなさんの道案内等5時からの時間よくおこるトラブル対策、仕事で来られている方も日帰りが多くなり、新宮市から田辺市迄の間には5時以降営業している店も少なく道の駅が必要だと感じるようになったからです。定休日もなくして、お客様の利用しやすい道の駅にと変身することができました。今はラジオのインターネット通信を利用し遠く北海道のリスナーの皆さんに和歌山のよさ、熊野古道の魅力についてのお話しをさせてもらっています。

女性だからこそできるサービスとは何か。今も、毎日いろんな場面に遭遇しながらも3歩進んで2歩下がる確実な一步の歩みを大切に。「来て良かった。会えて良かった。できるならもう一度。友達にも紹介するからね」の心の通う言葉をいただきながら日々心のあるおもてなしに努めています。癒しの熊野古道とは、どういう熊野か。尽きることのない接客業としてのあり方を考えながら、私のできる精一杯の笑顔でのお迎えを心がけ、ありのままの自然をこれからも皆さんと満喫して行きたいと思っています。



紀南地域と経済学部との懸け橋へ 和歌山大学経済学部地域・国際連携オフィス

経済学部地域・国際連携オフィス
特任助教 上野美咲



2012年11月よりこれまでの名称「和歌山大学経済学部地域連携オフィス」から「和歌山大学経済学部地域・国際連携オフィス」に改めるとともに、当オフィスでは、以下の4点の活動を展開してきました。①経済学部の組織・教員個人における地域社会への貢献活動の実態のとりまとめと学内外への情報発信、②地域社会の様々なニーズに応えるための学部の窓口業務、③学術交流等の国際連携サポート、④学内の諸組織との情報交流の促進や地域連携ネットワークの形成、という活動です。また、上記活動に関連するものとして、前年度よりアグリビジネス(農業関連産業)教育についても各種機関と連携を図りながら、推進してまいりました。

アグリビジネス教育の中身としては、本学の立地性、これまでの研究・教育体系、今後のニーズなどを踏まえ、

農業教育分野では全国でも類をみない「英語と日本語の併用教育」に留意しながら、経済学部を中心として進めているものです。

今回は、昨年度実施したアグリビジネス教育のなかの紀南地域で実施した活動を少しご紹介させていただきます。

2014年3月8日から9日の期間、田辺市にある都市と農村の交流施設「秋津野ガルテン」にて1泊2日の日程で合宿を実施いたしました。これは、農業経営の現場に入って、自らそこにある課題に向き合い、解決策を導き出すことを目的としたものです。講師は、和歌山大学経済学部アグリビジネス推進室 室長の足立基浩教授、橋本卓爾教授(松山大学経済学部教授・和歌山大学名誉教授)、そして、株式会社秋津野の関係者で行われました。参加者には、本学の学生のほか、

国際交流基金関西国際センターの外国人研修生等を含む9名にお集まりいただきました。

合宿初日は、「農業コミュニティビジネスの意義と役割」等の講義を受け、実際に田辺市内の果樹農家を見学しました。2日目には、アグリビジネスの起業企画案をまとめ、農家の方に向けたプレゼンテーションを行いました。その後の参加者からのアンケートをみても、紀南地域で実施したこの合宿コースへの満足度が非常に高いものでした。

今後の当オフィスの活動については、きのくに活性化センターや南紀熊野サテライトの地域連携機関との日常的な情報交流の円滑化を図り、紀南地域と経済学部との懸け橋となるべくより一層努めてまいりたいと思っております。



※2013年4月よりアグリビジネスのための教育体系の構築を模索するために経済学部内に設置されたものです。
※講師の肩書きについては講座実施時のものを参照しています。

きのくに活性化センターは、7月18日田辺市の市民総合センターで平成26年度定期総会を開き、平成25年度事業・会計報告のあと平成26年度事業計画ならびに予算案を了承しました。その内容は、次のとおりです。

平成25年度事業実績報告

①熊野発日本のサンマ文化と地域活性化

紀伊半島を拠点に日本列島沿岸の「サンマの道」における「サンマの食文化」マップ作成に関連し、東北2県(岩手・宮城)のほか新宮市・那智勝浦町などで聞き取り調査を実施。

②廃校舎の利活用と地域再生モデル

紀南地域における小中学校の廃校舎の利活用のモデルをブックレットにまとめる事業。

平成25年度は、現地調査で聞き取り調査を実施。

- ・養春小学校(串本町 旧古座町姫)、七川小学校平井分校(古座川町平井)
- ・九重小学校(新宮市)



③大学と商店街の連携・交流による新宮市仲之町商店街活性化モデルの研究

仲之町商店街で、和歌山大学経済学部学生が平成24年に続き、商店主インタビューや買い物客アンケート調査を実施、商店街関係者との意見交換会を実施。

【協力事業】1. アート田辺北山Dayへの参加

「アート田辺2013」が、25年8月3日に開いた「北山Day」に協力、『奥熊野・北山村の民俗誌100の話で語る村の今昔』を話題に、エッセイストの原水音氏によるトークショーを開催。

【広報活動】1. NEWSきのくにVol.18の発行

- きのくに活性化センターのHP(ホームページ)の更新

平成26年度事業

【独自事業】

①サンマの食文化 体験伝承とトークセッション

10月25、26日にJRきのくに線の紀南地域沿線で展開される「紀伊國トライニアート2014」で、きのくに活性化センターによる「サンマの食文化研究」を紹介。サンマの食文化のパネル展示

- ・「サンマずしづくり体験」：若い女性を対象にした伝統食のサンマずし作り講習会の開催
- ・トークショー「サンマずし その豊かな発酵の食文化」の開催。新宮駅周辺並びにアートトライイン内（内定）

②「サンマの食文化マップの作成」並びに「熊野・サンマ食文化研究会」設立

「サンマとその食文化マップ」(仮称)をイラストレーターに依頼し作成。

「紀伊半島サンマ食文化研究会」の設立をめざす。

③「廃校舎の利活用モデル」ブックレットの刊行

モデル校は、養春小学校(串本町 旧古座町姫)、七川小学校平井分校(古座川町平井)、九重小学校(新宮市)、篠小学校(那智勝浦町)、宮代小学校(田辺市龍神村)、そのほか

④「大学と商店街の連携・交流による新宮市仲之町商店街活性化モデル」研究報告書作成

【共催事業】

①世界遺産登録10周年記念シンポジウム「わがらの高原・10年の10年後」

紀伊山地の霊場と参詣道が、2004年7月世界遺産に登録されてから10周年。中辺路町のNPO囲炉裏が企画した「シンポジウム」を共催、「世界遺産で地域・住民はどう変わったか!」住民意識調査の分析・報告書の作成ほか、「シンポジウム」をコーディネート。



編集後記

きのくに活性化センターと読者の皆さんをつなぐ「NEWSきのくに」は、今回から新しいモデルに変更しました。サイズはこれまでより一回り小さなA4版にしました。編集方針は「読み物」「地域情報」「和歌山大学情報」の3つを柱に、自治体・経済界・県から発信する「トピックス」なども紹介します。地域の情報、周辺の情報をぜひ、きのくに事務局まで。

【広報活動】

- ・NEWSきのくに「春夏号」、「秋冬号」を発行